

第2回「津波浸水想定検討部会」

I. <鎌倉 明応津波堆積物調査地点選定について>

<調査の目的>

神奈川県を襲った歴史的な津波の痕跡を堆積物の中から見つけ、文献を補うために実施する。その際、鎌倉大仏殿が流失したという記録についても、念頭に置いて進める。

1. 鎌倉周辺地形・地質

- ・地形：南向きを開く丘陵地形に南下する滑川が形成した谷底平野であり、沖積低地堆積物は後背湿地の泥質堆積物と自然堤防・河道の移動に伴う砂礫質堆積物との互層になっていると推察される。
- ・地質：海岸部に広く砂丘堆積物が分布し、谷底平野奥部に海成/非海成湿地堆積物が分布。

2. 津波堆積物調査適地

- ・津波堆積物は津波による突発的な粗流堆積物の供給（イベント堆積物）の確認により行う。津波堆積物の特徴として、上方細粒化する円磨度の高い砂層で、押し波・引き波を示す堆積構造を示すこともある（七山ほか（2001）*など）。海水産珪藻化石の産出により陸源洪水堆積物と区別される。
- ・従って、津波堆積物がよく保存される、または明瞭に識別できる堆積条件としては、普段は粗流堆積物の供給が乏しい湿地や湖沼であり、河川の氾濫・河道の移動により頻繁に粗流物質が供給される河川周辺の堆積環境はあまり適さない。

*七山太・重野聖之・牧野彰人・佐竹健治・古川竜太, 2001, イベント堆積物を用いた千島海溝沿岸域における津波の遡上規模の評価 — 根室長節湖、床潭沼、馬主来沼、キナシベツ湿原および湧洞沼における研究例—。活断層・古地震研究報告, No. 1, p. 251-272.

3. 調査候補地の選定

- ・上記を満足し、調査可能な公共施設であり、立地が比較的古く人為的攪乱が最小限に留まっていると考えられる場所を選定する。
 - 海岸部に広く分布する浜堤（砂丘）堆積物の背後であること。
 - 滑川からある程度隔たること。
 - 沖積低地であること。

4. 埋蔵文化財発掘資料に見る鎌倉の歴史的土層

“中世都市”の以降に津波の痕跡が残されていないか、また津波堆積物調査適地選定のため、文献調査を行った（ここで、“中世”とは平安時代末期～安土桃山時代とした）。

結果、ほとんどの遺跡で各時代の攪乱が繰り返され、自然堆積物の残存は乏しく、津波堆積物の存在を示唆する情報はなかった。

当該地域でタイムスケールとなる宝永テフラ（1707年）は鎌倉大仏と若宮大路の一部で確認されているが、他ではほとんど認められない。

鎌倉大仏では宝永テフラの下位に2層、海生珪藻産出層準があるが、土丹からの産出である。つまり異地性（他の場所・時代からの混入）の可能性があり、結論としては”ジメジメとした沼沢地環境”としている。